

人と人

長生村立長生中学校 二年 大曾根 丈悠

「これは……入院ですね。」

そう言われた瞬間、僕の周りから音が消えた。中学一年生。セミが鳴き始める季節のことだった。

僕は「二型糖尿病」だ。血糖値がすごく高くなる病気だ。

「このままだと死んでしまう。命にかかわる合併症も引き起こす可能性がある。」

そう説明された。受け入れるのが無理なくらいの急な出来事だった。度重なる通院でただでさえ心が折れそうだったのに……。

それから数日がたった。入院は、僕からいろんなものを奪っていった。リモートでの授業は、ただ淡々と話を聞いているだけ。画面越しの友達ともあまり会話が弾まず、話をしている実感がなかった。今まで、当たり前だった日常を、入院という現実が染めていった。ベッドと棚が置かれている空間にたった一人。いくら時間を潰しても有り余る時間。同じことが続く毎日。泣き出してしまいう夜。すべてが苦痛。そんな日々だった。

入院して五日ほどたったある日、部屋の移動があった。一ヶ月ほど経っている感覚だった。部屋は、小学校低学年の子が二人、中学生ぐらいの子が一人の四人部屋だった。

最初は、みんな誰とも話さずに、ただただ静かな時間が流れていた。僕は、初対面でいきなり話せるようなタイプではない。でも、看護師さんや、保護者の方の力をお借りして、次第にみんなと話すようになっていった。やがて、今まで暗かった自分の視界が、段々と明るくなっていくのがわかった。いつしか僕は、病棟の子全員と仲良くなっていた。みんなと笑いながら共感しあい、ときには盛り上がりすぎて怒られた。それからは、あんなに苦しく、悲しかったはずの時間が、楽しい時間に変わっていった。時間が流れるのがものすごく早く感じた。

そして退院するときが来た。一緒に入院していた友達が、

「また一人になっちゃう。」

と言った。そのとき、病棟の子どもたちは次々と退院してしまい、自分とその子だけになっていた。僕は、

「また移動してくる子が必ずいるから、その子を新しい友達として迎え入れればいいよ。」

と言った。その子は、一瞬悲しげな顔をしたが、笑顔で頷いた。僕は病院をあとにした。

「失ったものばかり数えるな！」

これは、僕が大好きな「ワンピース」という漫画に出てくる言葉だ。入院をきっかけに、僕の当たり前は、奪われてしまった。しかし、絶望の中、失ったものから目を逸らすことができたのは、彼らがいたからだ。この一日が終われば、退院に一步近づく。そして明日に期待する。音が消えた灰色の世界に、友達が彩りを与えてくれた。そして僕は、入院をきっかけに、これまで以上に、今あるものや、今できることを大切にするようになった気がする。

病気、災害、戦争……。世界には、僕の想像を絶する苦しみが多く存在するだろう。だから、「もう耐えきれない。」「壊れてしまいそう。」こう思っている人たちに、心から伝えたい。絶望していても、不安な気持ちに押しつぶされそうになっても、どうか前を向いていてほしい。失ったことの穴を埋め、明るい明日へ導いてくれる誰かは、きっと現れる。そして、今つながっている人との関係を、さらに大切にしてほしい。その人たちは、どこかでいつか、あなたを助けてくれると思うから。

「失ったものばかり数えるな！」という言葉は、「仲間がいるよ！」という力強い台詞で締めくくられている。本当に苦しいときに最後まで残るもの、それは、「人と人とのつながり」だと、僕は思っている。